

[総合的な学習の時間]

コミュニケーション能力が高まる美術館との連携

ー子ども学芸員の実践を通してー

長谷川太郎*

1 はじめに

「美術館でもっと子どもが主役になるような鑑賞ができないだろうか?」。美術館の作品の前で、子どもが、自分の思いを語り合うギャラリートーク（対話型鑑賞）をする姿を見てみたい。そんな思いから、新潟県立近代美術館の協力の下、近美プロジェクト「子ども学芸員」を構想した。子どもが自ら近代美術館の作品を選び、その作品についての解説や思いを来館者に伝えると共に、作品を通してコミュニケーションをしていく。

新学習指導要領では、「探究的な学習としての充実」や「体験活動と言語活動の充実」が総合的な学習の時間の充実において欠かせないものと示されている。まさに、近美プロジェクトは、総合的な学習の時間の充実において欠かせない、「子どもにとって価値のある探究活動」があり、「感動する体験」と「他者と関わりコミュニケーション能力を高めること」が期待できる取組であると考えた。

本研究は、当校の特色である造形教育を中核とした6学年の総合的な学習の時間で行われている校内美術館「こだま美術館」を中心として“絆”アートプロジェクトを企画・運営していく1プロジェクトである。(表1)「こだま美術館」では、子どもの発想力や企画力を生かして、空教室を美術館として運営する。この実践は、十数年の歴史があり、子どもの主体的で魅力的な活動が行われてきた。「こだま美術館」の総合的な学習の時間における学習材としての有効性は、2009年、菊地氏による教育実践研究論文¹⁾にも述べられている。子どもによる学芸員の実践例は、地元美術館との連携活動の実践として2009年、三澤氏による兵庫県の高校生の実践「高校生がファシリテーター」²⁾が紹介されている。昨年度の2010年から、当校6学年の総合的な学習の時間において、近美プロジェクトをスタートした。「学芸員に挑戦!～子どもが選ぶ名品展～」³⁾と題して、近代美術館の常設展の作品の中から、子どもがお気に入りの作品を選び、学芸員に挑戦した。

本研究では、美術館での「子ども学芸員」が総合的な学習の時間における学習材としての有効性と今後の美術館連携を探っていく。「子ども学芸員」の経験から、芸術的な感性が高まるだけでなく、他者と絵を介してギャラリートークをすることが楽しいと感じ、コミュニケーション能力が高まることを期待し研究を行う。

2 “絆”アートプロジェクトの概要

6学年の総合的な学習の時間の年間テーマとして、「自分が変わる 地域が変わる アートを通して“絆”を深めよう」を掲げた。今、自分たちに何ができるか考え、芸術を通して地域に働きかけていく活動である。

子どもの願いを集約し、大きく3つのプロジェクトを設定する。その中から自分が取り組みたい活動を1つ選ぶ。活動内容を2期に分けて、11月以降にプロジェクトのメンバーを再編する。年間を通して、3つのうち2つの活動に取り組むことができる。主な活動の内容は、次の3つである(表1)。

一つ目は、校内にある「こだま美術館」を生かし、全校児童や地域の方々にアートを発信する。絆をテーマに子どもが長岡在住の作家(県展入選の作家)を探し、その作家の企画展を企画・運営をする「こだま美術館プロジェクト」。

二つ目は、新潟県立近代美術館と協力し、絆をテーマに美術館の作品を選び、子どもの目線で来館者に解説していく「子ども学芸員」を行う「近代美術館プロジェクト」。

三つ目は、避難してきた福島県の方々や地域住民に共同制作を呼びかけ、校区の人たちと交流することで絆を深める「まちかど美術館プロジェクト」である。

* 長岡市立上組小学校

表1 2011年 6 学年総合的な学習の時間年間計画表

期	第 1 期										第 2 期				
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3			
①こだま美術館 【70時間】	オリエンテーション	こだま美アートフェスタ準備	こだま美アートフェスタ①	企画展の作家を探す ₂		「絆」展準備 ₁₄	「絆」展企画展① ₁₀	こだま美アートフェスタ② ₁₂	企画展② ₈	上組に感謝プロジェクト					
②近代美術館 【70時間】		いわさきちひろの作品選	いわさきちひろの作品調べ	学芸員準備 ₂	子ども学芸員① ₂	・こだま美・おっこ市サポート ₂₄		近美の作品調べ学芸員準備 ₁₀	学芸員② ₄						
③まちかど美術館 【70時間】		絆プロジェクト・コンサート ₅	絆プロジェクト・コンサート・共同作品制作 ₅	共同作品制作 ₂		地域と共同作品 ₁₂	・こだま美サポート ₁₀	まちかど美②宮内駅プロジェクト（階段アート） ₁₈							
学校行事など	・参観日 ・家庭訪問	・プール清掃 ・運動会	・参観日 こだまフェスティバル	・個別相談 ・修学旅行	夏休み	・陸上大会 ・マラソン	・芸術祭	・参観日	・個別相談	・スキー教室	・参観日	・卒業式			

3 研究の目的

本研究の目的は2つある。1つは、美術館との連携で行う「子ども学芸員」が総合的な学習の時間における学習材として有効であるか検証することである。もう1つは、「子ども学芸員」を経験することで、ギャラリートークを楽しみ、コミュニケーション能力が高まることを検証することである。

4 研究の主な内容と方法

(1) 内容

本研究では、近代美術館プロジェクトの「いわさきちひろ子ども学芸員」を検証していく。新潟県立近代美術館において、子どもが芸術作品と関わり、自分が選んだ作品を自分の言葉で来館者に伝えていく活動である。

この活動は、夏に開催された「いわさきちひろ展」を題材として子どもが来館者に作品の魅力を紹介していく。いわさきちひろの作品やその生き方から自分が感じたことやその作品のよさを多くの方々に伝えることができる活動となる。美術館でしか経験できない作品との出会いを大切に、その感動を自分の言葉で伝え、他者と共感していく。美術館という特別な空間で多くの作品に出会うことで子どもの美的感性を高め、また、多くの他者と交流することで、子どものコミュニケーション能力が高まることを期待している。

(2) 活動計画（全20時間）

対象とする子ども 6年生「近美プロジェクト」28名 男子15名 女子13名（学年97名）

次	学習活動	・留意点 ☆評価規準
1次 5時間	○いわさきちひろについて調べよう ・作家について調べる。 ・作品について調べる。 ・調べたことを友だちと共有する。	・本やインターネットで作家や作品を調べる。 ・インターネットの情報については、信用できる情報であるか注意する。 ・作品集は、中央図書館から数冊借りる。 ☆作家や作品について興味をもち、進んで調べ活動をしている。
2次 5時間	○お気に入りの作品を選ぼう ・いわさきちひろの作品を決定する。（9枚） ・少人数のグループになり作品について伝えたいことを話合う。 ・学年内で作品解説をする。「いわさきちひろを語ろう」 ・友だちの意見も参考にしながら、解説文や作品紹介を再検討する。	・子どもが絆を感じ、紹介したい作品を相談しながら9枚選定する。 ・3人程度のグループを編成し、1つの作品の解説を担当する。 ・ギャラリートークは、学年全体で行い他のプロジェクトの子は聞き役として参加する。 ☆ギャラリートークを楽しみ、友だちの意見を自分の発表に生かそうとしている。
3次 10時間	○子ども学芸員をしよう ・近代美術館で学芸員との打ち合わせをする。 ・作品紹介のパネル（キャプション）の作成。 ・近美で学芸員をする。（7月26日、8月5日） ※8月5日：第51回関東甲信越静地区造形教育研究大会新潟大会の午後1：30から美術館ワークショップで行う。	・7月5日に近美の常設展見学と学芸員の打ち合わせを行う。 ・7月26日（火）1回目の「いわさきちひろ展」子ども学芸員をする。 ・8月5日（土）「いわさきちひろ展」子ども学芸員をする。 ※午後1：30～前半20分、休憩10分、後半20分（7/26と8/5） ☆来館者に作品の解説や自分の思いを伝えたり、感想をもらったりしながらギャラリートークを楽しもうとしている。

(3) 研究方法

美術館との連携で行う「子ども学芸員」が、子どもにとって価値ある探究活動や感動体験があり、コミュニケーション能力が高まることを目指して、次の点に取り組む。

① 美術館の担当学芸員と学習の共通理解を図り、協力体制を得る

美術館と年間を通して総合的な学習の時間の活動を行っていくためには、美術館の展示内容に合わせて、どのタイミ

ングで子どもとの活動を仕組んでいけばよいのか、打ち合わせる必要がある。美術館の年間スケジュールとこれから行われる企画展や常設展などの内容から、子どもの発達段階や今後積み重ねる経験を考慮して、子ども学芸員の時期を決めていく。また、子ども学芸員で育てたい子どもの姿やねらいを共通理解することで、より子どもの思いにあった活動を組んでいくことができる。

今回の実践で学芸員から主に協力していただくことは、①学芸員としての仕事や美術館の意味を教わる ②作品解説についてのサポートやアドバイスをもらう ③子ども学芸員当日の動きのサポートの3つである。

② より質の高い学芸員を目指す、価値ある探究

美術館で学芸員をするということは、お金を払って見に来られる来館者を満足させなくてはならない。作品や作家について調べることはもとより、自分自身の作品への思いを確かなものにしておかななくてはならない。しかし、すべての子どもが話上手であり、十分な解説を作り上げられるという訳ではない。この点については、個々の力に大きな差がある。そこで複数人のチームを設定し活動することにした。解説するときの内容を相談し、よりよいものを用意することができる。また、お互いの解説を聴き合いながら、練習することもでき、経験値を上げることもできる。2人が、解説するために絵の前に立ち、もう1人は聞き役になれるように3人という人数設定をした。また、当日、1人が欠席の場合でも2人いれば、解説が可能であると考え3人チームとする。この協力体制で、より質の高い学芸員を目指す。

③ 「ギャラリートーク」で、会話する楽しさを味わわせる感動体験

作品の解説をすることの醍醐味は、作品を通して相手と話をして共感できることである。鑑賞する人にとっても新たな見方や発見があるような解説を受けると、作品をより深く見ることができ、鑑賞を楽しめる。そのような新たな発見を見つけられるような会話ができたとき、充実した気持ちを味わえると考ええる。そこで、ただ作品を一方向的に解説するのではなく、相手に質問したりクイズを出したりと対話型鑑賞の方法（ギャラリートーク）を取り入れることで、コミュニケーションを楽しめるようにしたい。

美術館で子ども学芸員をする前に、学年全体で、このギャラリートークの授業を行い、対話型の鑑賞の楽しさを感じられるようにしていく。

④ 美術館での子ども学芸員を2回実施することで、コミュニケーション能力を高める

昨年度の子ども学芸員の実践から、複数回の実施がとても有効的であることが見えてきた。1回目は、子どもは緊張し、用意した解説で精一杯になる。1回目の反省を元に自分の解説で、もの足りなかった部分を補う時間を設ける。2回目には、少し解説することに余裕が生まれ、会話を楽しめるようになる。会話に余裕が生まれてくると、さらにギャラリートークがしたくなる。その他者と主体的に関わりあっていくことで、コミュニケーション能力が高まっていくと考えられる。そこで、今回も2回の子ども学芸員の日をあらかじめ設定する。また、1回の子ども学芸員の日程の中で前半と後半を設けて、休憩時間を取りつつ、解説がよりよいものになるように作戦を立てたり、学芸員の方からアドバイスを頂いたりする時間を設定する。子どもが今までの経験を活かし、ギャラリートークを楽しめるようにしていく。

5 実践内容

(1) 子どもの実態に合わせた学芸員のバックアップで伸びた子ども

学芸員の方からは、4月の中旬に学校に来ていただき、近代美術館のことや学芸員の仕事について教えていただいた。また、6月に学年で行なった「いわさきちひろを語ろう」では、いわさきちひろ展の担当学芸員も授業に参加し、子どもの発表を直接見てもらいアドバイスや講評をしてもらった。

いわさきちひろの作品は、あえて色を塗らない部分があることなど、専門家の立場から絵を読み解くポイントをアドバイスしてもらえた。また、絵を見ている人に対しての立ち位置や、話す速さも分かりやすく教えていただいた。その後の子どもの発表の仕方が向上し、特に立ち位置を意識して自然にできるようになっていった。

子どもの感じたことも大切にして解説文を考えてきたが、付け加えるとよい内容を学芸員の方から教えてもらえることで、説得力がある解説となっていった。

(2) 緊張する「子ども学芸員」も3人チームで乗り越えた子ども

学年で行った「いわさきちひろを語ろう」では、さほど緊張もせず作品解説をすることができた子どもであったが、7月26日に初めて美術館で解説をするときには、多くの子どもが緊張していた。Aさんは感想で、「実際にやってみると、とても緊張しました。」と述べている。また、「見に来た人と楽しく話せたし、結構盛り上がりました。」とある。2人で協力して解説することで、気持ちが楽になり来館者の方々と会話することができたようである。

途中の休憩時間には、チームで、もっと改善するとよいところを相談し、後半の解説に生かしていた。3人のチームの効果として見えてきたのは、他の2人が解説をしているときに、客観的な立場で友達の解説を聞くことで、自分の解説に生かせるということである(写真1)。友達の解説を見ながら、笑顔で接することの大切さや、適切な声の大きさに気が付き、回数を重ねるごとに上達がうかがえた。

(3) ギャラリートークで伝える楽しさを感じた子ども

学年全体で授業をした「いわさきちひろを語ろう」では、友達に対して解説をした。自分たちの解説を聞いてもらい充実感を味わう子どもが多かった。最後に友達から感想の付箋をもらい、美術館での解説の参考とした。多くの付箋をもらえたことでうれしさを感じていた。

しかし、この授業では、会話が弾むことはなく、聞き役の子どもが質問や感想を返す程度になってしまった。

そこで、美術館での子ども学芸員に向けて、子どもは、会話が続けるために相手に質問や意見を聞くことを考えた。また、相手から質問されたときには、逆に質問を返すと会話が続けることも発見し、発表に取り入れていった。

絵の左下を見ると、猫がいます。ちひろさんも猫を飼っていたことがあるそうなので、飼っていた猫をモデルにしたのではないのでしょうか。この絵は、ケーキのろうそく、お菓子、ジュースの量などとても細かく描いてあるなあと思いました。みなさんは、どのように思いましたか。【5歳のお誕生会】(解説文一部抜粋)

美術館で子ども学芸員をやった子どもの感想では、「多くの人と会話ができまし、お客さんが質問にも答えてくれた時は、伝わっているんだなと思いました。」「台本には書いていないことをやってみると楽しかった。お客さんも意見をいろいろ言ってくれました。」と、お客さんとのやり取りができたことに、楽しさを感じるようになった。

(4) 前回の経験を生かし、多くの来館者に自信をもってギャラリートークした子ども

第1回目の7月26日は、平日ということもあり、来館者の数も比較的少なかったが、いわさきちひろのファンの方が多く来館していたため、作品への思いを聞くことができたチームもあった。「見に来た人の思い出や経験が聞けて、とてもうれしかったです。」と感想を述べたBさん。いわさきちひろの絵を見に来たお客さんが、解説を聞いた後で、絵に対してのエピソードを語ってもらえたことをうれしく感じている。また、そのエピソードを自分の解説にも取り入れて、よりお客さんが聞きたくなるような解説に工夫していた。

よりよい解説になるように、学芸員の方から、適宜アドバイスをもらうことができた(写真2)。発表している子どもに合わせて、次のような内容を伝えていただいた。

- ・時には、見ているお客さんの方に移動し、同じ目線で話をするとお客さんも緊張しない。
- ・見てほしい部分を指で示し、「どうぞ近くでご覧ください」と間近で鑑賞できるようにする。
- ・慣れてきたら、お客さんの顔もたまに見ながら話をするとな自然な解説になる。

お客さんから「もっと語尾をはっきり言って、ゆっくり話すともっと伝わりやすい。」とのアドバイスをもらったCさん。その後の発表で意識して解説を行った。感想では、「発表のしゃべり方と話すスピードがよくなったと思います。」と振り返っている。

第2回目の8月5日は、関ブロ大会ということもあり、会場には、多くの来館者が訪れた。その多くの来館者に、子どもは緊張していたが、前回の経験を生かして立ち位置を工夫しながら解説したり、目線を意識したりして解説を行っていた。

「手紙をポストに入れる男の子」を解説したチームは、前回、来館者の方から指摘された「丸いポスト」を話題に取り入れて解説していた。「今のポストは四角いポストですが、皆さんはこの丸いポストを見たことはありますか？」と来館者に投げかけることで、それぞれの思い出を語ってもらうことができた(写真3)。解説をしたAさんは「これは、こういう物だよと説明してくれる人もいて、私たちの知らないことを教えてもらいました。トークができているんだなと感じて楽しくなりました。」と感想に述べていた。



写真1 3人チームで学芸員をする子ども



写真2 学芸員から立ち位置のアドバイスをうける



写真3 赤いポストを話題にする子ども

6 考察

(1) 「子ども学芸員」の総合的な学習の時間における有効性

今回の実践で、見えてきた美術館で活動することの価値は、次の4点である。

- ・芸術作品に触れることで、美的感性を養うことができる。
- ・多様な表現や、様々な作家の生き方を学ぶことができる。
- ・質の高い学芸員を目指すことで、自ら学び探究する力が高まる。
- ・学芸員を繰り返し体験することで、コミュニケーション能力を高めることができる。

子どもは、今回の活動で、いわさきちひろの美的感性や作家の生き方を学んだ。しかし、それは、受け身的な学びではなく、自らが気に入った作品を選び、「解説したい」と思ったことから、始まったものであった。そこには、主体的な学びがあったと言える。また、その学んでいく過程は、その子どもにとって目的がはっきりとした価値ある探究である。そして、他者に理解されるためには、どのようにしていったらよいのかという問題解決力と表現力が必要となってくる。美術館での「子ども学芸員」体験は、その子どもたちの高まりたいという学びを促す魅力的な体験があったのだ。

今回のような学芸員を体験するためには、専門の立場からの学芸員のバックアップが不可欠となる。総合的な学習の時間として、子どもの学びを高めるために必要な学芸員の協力内容は、次の2点である。

① 絵の読み解きについてのバックアップ

子ども学芸員で大切にしたいことは、自分の感じたことを中心にして解説することである。しかし、感じたことだけでは、相手への説得力や共感を得ることはできない。学芸員に求められることは、絵の表現を説明するだけではなく、作家の絵に対する思いや人間性、家族や時代背景など多くの専門的な知識である。子どもは、作品集の解説などを基にして自分たちの解説を考えた。しかし、その作家の生きた時代背景や思いなどを解釈することは難しい。そこで、子どもが考えた解説をあらかじめ学芸員の方にチェックしてもらい、より分かりやすい解説になるようにアドバイスをいただいた。専門的な知識と子どもならではの視点が合わさることで、深みのある解説となった。また、現場での子どもの解説の様子を見ていただき、来館者とのやり取りから、つけ加えるとよい点や豆知識を教えてもらった。ちひろについての解説の幅を広げ、発表の自信にもつながっていった。

② 来館者に合わせた解説のアドバイス

絵の解説をするときに、見る人の立場に合わせて立ち位置を変えることが重要であることを教えていただいた。注目させたい部分を紹介する時に、作品を指さし、間近で見てもらったり、来館者と同じ位置に移動して解説したりする方法は、本職の学芸員だからこそそのアドバイスである。子どもの解説に合わせて、改善点を的確にアドバイスしてもらえたことで、第2回目子ども学芸員では、発表が自然になり、子どもも落ち着いて解説することにつながった。専門的な知識をもっている学芸員のバックアップがあることは、子どもにとって安心感を与えてくれるものであった。そのおかげで、自分たちの解説をより相手に分かりやすく伝え、会話を楽しもうとする子どもの姿が見られるようになっていったのである。

(2) 3人チームでよりよくしようと探究し高めた学芸員の解説

3人のチームにすることで、自分たちの解説をよりよくしようと探究する姿が見られた。また、すべての子どもに役割ができ、発表の苦手な子どもも、自信をもって取り組み解説を上達させていった。絵を選ぶことからチームの3人で相談して決め、知識や思いを共有してきた。その経験が、多くの来館者に対して自信をもって自分たちの解説や思いを伝えることができ、質の高い学芸員として来館者に満足してもらえたのだ。

また、来館者と1対1ではなく、複数で話すことで、お互いにフォローしながら解説できた。複数人いることで会話が盛り上がり、楽しさを感じやすいことが分かった。回数を重ね1人でもできることが理想だが、経験の浅い子どもにとって、今回のチーム編成は有効であったといえる。

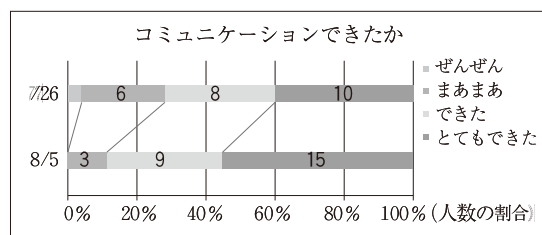


図1 子ども学芸員でコミュニケーションできたか

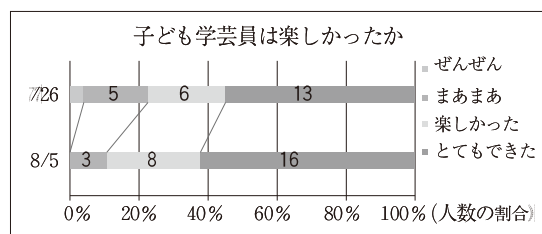


図2 子ども学芸員は楽しかったか

(3) 繰り返すことで高まるコミュニケーション能力

子どものアンケートから、回数を重ねることで、コミュニケーションができたと感じる子どもの数が増えていることが分かった(図1)。事実、7月26日の1回目では、解説文をそのまま読んでいる子どもであったが、8月5日では、多くの子どもが自分の持っている解説文を読まずに、相手の目を見たり、立ち位置を変えたりしながら解説をしていた。また、来館者からの反応もよく、会話が盛り上がるチームも増えていった。発表が上手いきき、来館者との会話もできたことから、「楽しい」と感じる子どもが増えたと推察される(図2)。

7月26日では、満足のいく解説ができなかったDさんは楽しさに対し「ぜんぜん」を選択したが、8月5日には、前回より来館者とコミュニケーションがとれたと感じたことから、「まあまあ」に自己評価が上がったのである。

2回行うことで、経験を積み重ね、それを存分に生かすことができたとき、子どもの満足度は上がる。同じような体験活動でも、複数回行うことが子どもの能力を高めることに対して、非常に有効であることが分かった。

子どもは、学習してきた情報を伝えたい相手に表現するが、緊張して相手には上手く伝わらない。しかし、よりよい表現方法を知ったり、相手からの感謝の言葉をもったりすることで自信につながる。さらに会話の中で新たな発見があると、次の解説に生かしたくなる。その得た情報を再構築して自分の新たな表現へと変えていく。その過程が子ども学芸員にあり、即実践できる場が美術館の中にあったのだ。学校では経験できない緊張感の中、子どもは、自分の表現を進化させながら学芸員を行い、コミュニケーションする力を高め、楽しさを感じていたのである。

(4) 来館者にとっても価値のある「子ども学芸員」

実物の作品、そして日常ではない空間。その美術館という空間で、初めて出会う大人と対等に、むしろ教えるような立場として話をする経験は、他ではできない。子どもは、美術館の展示室にいただけでも緊張してしまうのである。そのような場で、自分の調べてきたことや感じたことを初めて会う人に伝える経験は、対人関係のスキルアップにもつながる。人前で話すことに抵抗のあるDさんが、初めて会う人とも自信をもってコミュニケーションがとれ、楽しいと感じ始めたのがその効果であろう。

ただ絵を見ているよりも、このように子どもから解説をもらおうと、とても楽しく絵を見ることができました。お子さんの目と大人の目は、まるっきりちがうことを感じ、子どもの感性に驚きました。今日は、このような解説があることは知らずに来ましたが、とても楽しいです。

また、7月26日の来館者から、次のような言葉をいただいた。

子どもの視点で語られる解説は、大人にとって新しい発見がある。美術館に来てよかったという思いをもってもらったことは、大きな収穫である。大人は、1枚の絵を子どもと会話することで、今の子どもが抱えている思いや感性を知ることができる。そのことが、ただ絵を鑑賞することよりも楽しく、特別な時間を過ごしたと感じることにつながったのである。今回の子ども学芸員の実践は、子どもと来館者双方にも価値のある活動であったといえる。

7 おわりに

今回のような子ども学芸員を成功させるには、美術館と活動の意図や育てたい子どもの姿を、担当学芸員の方と相談し、共通理解を図ることが不可欠である。どの展覧会の内容で子ども学芸員を行うのか、回数やその方法など、打ち合わせる課題は多い。また、美術館は、貴重な作品を収蔵している立場から、自由に活動できるというわけではない。美術館の企画展の目的や施設の制約について理解した上で、子どもが活動できる最大限を探っていく必要がある。そのような実態からも、今回の子ども学芸員の実践は、美術館との連携において今後も参考となる事例になったといえる。まだまだ、可能性がある子ども学芸員である。今後も子どもが美術館に行くことが楽しみになり、多くの力を伸ばしていける活動を提案していきたい。

引用文献(参考文献)

- ¹⁾ 菊池亜弥子 「校内美術館『こだま美術館』の企画・運営を通した総合的な学習」教育実践研究 第19集, 2009年
- ²⁾ 大坪圭輔+三澤一実/編 「美術教育の動向」武蔵野美術大学出版局, 2009年
- ³⁾ 堀田祐嗣 「学芸員に挑戦! ~子どもが選ぶ名品展~」第51回関東甲信越静地区造形教育研究大会新潟大会, 2011年
結城和廣 「造形教育を学校経営の柱にー空き教室が子どもの美術館ー」日本文教出版株式会社 2006年